

マツカイ市ってどんなまち？

国内有数のさとうきび産地

マツカイ市は、オーストラリアのクィーンズランド州の北東部に位置する都市です。旧松浦市との姉妹都市締結当時は、約2万3千人だった人口も、平成6年にパイオニア・シャイヤと合併し、現在は約8万人になっています。

マツカイ市の経済を支えているのがさとうきびの栽培とその加工です。マツカイ市は、オーストラリア有数の産地で「シュガーシテイ」と呼ばれています。

また、鉱山のあるまちと隣接していることから、鉱業を支援するための鉱業関連会社の増加が著しく、鉱山で働く人の家族の居住地にもなるなど、人口も増加しています。



▶ さとうきび畑の中にある製糖工場

- 人口 約8万人
- 面積 約2千9百平方キロメートル
- 平均気温 26・4度
- 産業 鉱業サポート、農業（さとうきび）、漁業、畜産（肉牛）
- 特産品 砂糖、魚、鉱業器具
- 観光名所 ブランプトン島、リンデマン島（ウィットサンデー諸島の一部）、ヒルスバラ岬など

交流のきっかけ

石炭がっなく交流

松浦にある石炭火力発電所で利用する石炭の約6割が、オーストラリア産のものです。松浦が輸入している石炭の積み出し港が、マツカイ市の近郊にあること、人口規模が似ていること（姉妹都市締結を行った当時のマツカイ市の人口は2万3千人）から、旧松浦市とマツカイ市の間で姉妹都市提携の気運が高まり、協議を進めた結果、平成元年7月に「姉妹都市締結調印」を行いました。



▲マツカイ市近郊の港から石炭を運ぶ「松浦丸」

これまでの交流

訪問団・使節団による盛んな交流

マツカイ市との交流は、これまで「松浦市青少年親善使節団」14回、「松浦市民親善訪問団」9回、「マツカイ市青少年使節団」9回、「マツカイ市親善訪問団」9回の派遣と受け入れを通して交流を深めています。

回数を重ねることに、交流の輪が広がってきています。



▲市内の各学校でも交流を深めてきました



▲訪問した学校で運動会に参加



▲平成16年にマツカイ市に寄贈したツルのモニュメント



▲交流の様子を伝えるマッカイの新聞

▶マッカイ市の芸術家
ローズマリーさんと
版画制作



▶小学生と尻相撲に挑戦!



▶小学生に
箸の使い方伝授



マッカイに行ってきました!

8月17日から24日にかけて「第14回松浦市青少年親善使節団」がマッカイ市を訪問しました。訪問したのは、市内の中学・高校生15人と引率者2人で、滞在中はホームステイや学校訪問などの体験をし、市民との交流を深めてきました。

親善使節団員からひとこと

たくま
黒岩 拓真君 (佐世保西高3年)

ホストファミリーや友人に恵まれ、とても有意義なものになりました。

かすみ
和田 香澄さん (今福中3年)

英語が通じない時、辞書を使ったり、身ぶり手ぶりをしたりして、何とか伝えようと奮闘しました。

けいた
寺澤 慶太君 (今福中2年)

モーニングティーを初体験しました。日本でもあったらいいなと強く思いました。

まあの
三浦 眞亜乃さん (志佐中3年)

滞在中あまり仲良くできなかったホストシスターが、最後の夜にギュッと抱きしめてくれて感激しました。

あゆみ
吉田 歩未さん (志佐中3年)

ホストファミリーに優しく接してもらって、改めて日本の家族の存在の大きさも実感できました。

こうすけ
佐野 公亮君 (志佐中2年)

乗馬やブッシュダンスなど初体験でしたが、すべてに親しみをもつことができました。

はるき
深水 晴紀君 (志佐中2年)

ホストファミリーは、本当の家族のように接してくれて、とても楽しい時が過ごせました。

まい
青木 麻衣さん (鷹島中2年)

地元の小学校を訪問して、生徒たちの初対面でも積極的に親しくなろうとする姿勢を見習いたいと思いました。

あゆみ
田島 歩さん (鷹島中2年)

ホストファミリーが優しく接してくれてとてもうれしかったです。出会えてよかったです。

ゆりえ
森 友梨映さん (鷹島中2年)

帰国時、楽しい思い出たちと一緒に、生まれて初めてのインフルエンザももって帰ってきてしまいました。

しの
通山 紫乃さん (福島中2年)

トイレに鍵が無いところがあったり、インフルエンザで処方された薬が箱に入っていたりしたことなど、日本との違いに驚きました。

しほ
池野 史歩さん (御厨中3年)

食生活や就寝時間の違いなどに驚きましたが、その生活に慣れることができました。

かなみ
原 可奈美さん (御厨中3年)

ホストファミリーとの充実した生活やたくさんの友達ができただけで、時間が過ぎるのが早く感じました。

ただのり
松下 忠功君 (御厨中3年)

ホストファミリーやマッカイ市の人たちがやさしく声をかけてくれたことで緊張がほどけ、楽しい時間を過ごすことができました。

かんた
内野 寛太君 (御厨中2年)

他国の人とも心通わせることができる英語の重要性を学び、英語を身近なものに感じることができました。